

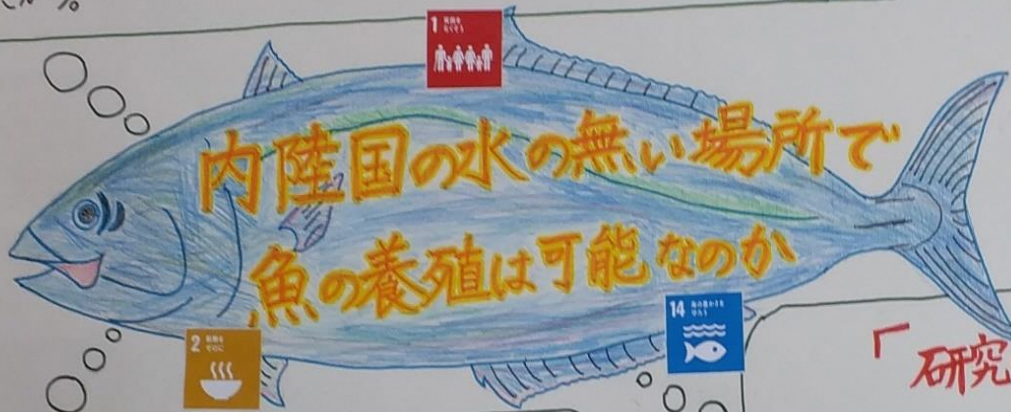
# 「研究動機」

貧困・飢餓を解決する方法はないのかという疑問を持った。  
また、別の問題に目を向けると今日の世界では魚をとりすぎており、海洋の持続可能性が損なわれているので、人工的に魚を増やすことで海の豊かさが守れるのではないかと考えた。また、魚を増やす方法の一つに養殖があることに気付いた。海や川などでは養殖が行われているが、水の無い場所でも養殖が出来れば、砂漠がある内陸国でも養殖ができ、貧困や飢餓で苦しむ人々を救え、自分たちと同じように新鮮でおいしい魚を食べさせることが出来ると思ったから。

## 「フードワークのアイデア」

森林や砂漠などでも養殖でお  
「好適環境水」の開発をしている  
岡山理科大学工学部シオ応用科学科  
准教授山本俊政氏に取材を申し込む。

みんなに  
食べてもらいたい  
ギョ!



## 「研究の意義・価値」

○ アフリカは現在、淡水魚を食べることができないが、アフリカの海水魚は、熱帯魚なので、食べることができない。

その為

アフリカでは、おいしい海水魚を新鮮な状態で食べることができない。

そこで

アフリカで養殖をすることができれば、アフリカの人口も新鮮な状態でおいしい海水魚を食べることが出来る!!

そのおかげで

○ イセ国へ、その養殖した魚を輸出でき、経済面で成長することができると考えられる。

○ そのお金を使って社会福祉まで、貧困と飢餓を救うことができる。

○ ○ ○ 日本では...

東日本大震災による津波で養殖場が破壊され、大きな被害が出た。

日本以外にも魚を簡単に食べることができる国でも、魚に関わる大きな被害がある。

内陸で養殖することができれば、このように津波などによる魚に関わる大きな被害を少しでも減らすことができる!!

# 「研究内容」

◎ これから調べること

- 山 森などの水の無い場所で魚を養殖する際、水を養殖施設にどこからくみ上げてくるのか。
- 海水魚、淡水魚ともに育てることのできる「好適環境水」を使い、具体的にどのような国、場所で養殖するのかがよいか。
- 良好な飼育水質を保つことのできる「水質浄化技術」と「好適環境水」は融合可能なのか。
- 陸上養殖は現在ある「かけ流し」、「半循環式」、「閉鎖循環式」の方法のうち、どの方法がよいか。

◎ 調べて分かったこと

- 「好適環境水」は真水と施設稼働用のエネルギーを確保できれば場所を問わず養殖が可能だということ。
- 「好適環境水」を使えば魚を早く美味しく育てることができる。

